

歴史を歩く 19

『戦国時代の群像』 第三話 三州大乱の始まり



島津忠良は、島津氏発展の基礎を築いた『島津家中興の祖』とされている。琉球を通じた明(当時の中国)との貿易などを充実させ、一方で儒教的な教えを基本とした教育論で子孫ばかりでなく家臣団の育成を図った。これが後々、薩摩藩の独特の士風と文化を創り上げることとなる。忠良の嫡男であり、後に島津本家第15代当主となる島津貴久もまた、『島津の英主』として称えられている人物である。

島津忠良の祖父伊作久逸は、文明16年(1484年)櫛間地頭の頃に島津本家に対して叛旗を翻した人物である。敗れて伊作(日置市吹上)に帰ったのちの明応9年(1500年)薩州島津家の内乱に巻き込まれ、殺された。それ以前の明応3年(1494年)に父伊作善久も下男に殺害されている。

このように一族の不運に見舞われた少年期の島津忠良は、母常盤によって坊津一条院の末寺である海蔵院の頼増和尚のもとで教育を受けていた。

未亡人となった母の常盤は一時伊作島津家の当主となるが、周辺の諸豪族の攻撃を受けることもあった。常盤は度々田布施の相州家当主島津運久に援軍を頼み、諸豪族の攻撃を撃退していた。

常盤は島津運久から結婚を申し込まれていた。常盤は子忠良を養子として伊作家・相州家を継がせることを約束する条件で文龜元年(1501年)に運久と再婚をする。

元服をした忠良は、永正3年(1506年)年に伊作島津家を継ぎ、さらに永正9年(1512年)に島津運久と常盤との約束どおり相州島津家も継いだ。この時忠良は若干21歳であったが、すでに領内の整備だけでなく、自ら禪の修行に励み、学問を修め、領民には善政を施すなど、人を統べる資質を十分に発揮させ、領内外に評価を受けるまでになった。

大永6年(1526年)、島津本家第14代当主島津忠兼は、弱体化した政権基盤の立て直しを図って評判の高い相州島津家の島津忠良に支援をもらうようにし、忠良の子島津貴久を養子に向かえた。

同年11月27日に、島津忠兼は元服した貴久を島津本家15代目として家督を継がせ、守護職を譲った。そして自身は大永7年(1527年)に忠良の領地である伊作に隠居した。

このようにして島津忠良と貴久による薩摩・大隅・日向の三州統一への扉が開かれることとなったのである。

とは言え、この二人に大きく立ちほだかる大きな壁があった。以前に権力を恣にし、島津本家の跡継ぎを狙っていた薩州家

当主島津実久とそれを支持する各地の豪族の存在である。実久の武力行動は貴久が守護職を譲り受けた直後に始まった。まず、大永7年(1527年)6月5日に実久は、加治木地頭の伊地知重貞と帖佐地頭の島津昌久に兵を挙げさせ、武力による島津忠良・貴久親子の排除と実権掌握を図った。これは直ちに忠良によって鎮圧されたが、同時に実久は、舅の川上忠克を島津忠兼のもとに派遣し、守護職復帰の交渉に当たさせた。さらに実久自身も忠良の所領の伊集院一宇治城・日置城と鹿児島島の谷山城を攻め、とうとう鹿児島清水城にいた貴久に守護職返上を迫るに至った。

同年6月15日夜、に窮地

に陥った貴久は断腸の想いで、密に鹿児島を脱出し、田布施の亀ヶ城に逃れた。そして6月21日、伊作に隠居していた島津忠兼は、実久に鹿児島に迎えられ、『島津勝久』と名を改め、守護職に復帰することになった。

しかしこの約一月後の7月23日に、島津忠良は島津勝久の隠居城としてその家臣に守らせていた伊作亀丸城を陥落させ、自身の居城とした。そして、忠良はこれからの約5年半の間、勢力を蓄え、三州の情勢を見据えながら、実久勢力への反撃の機会を静かに待ち続けたのである。

【内村憲和】



▲島津忠良